

平成 26 年 オホーツク海海域におけるケガニ資源密度調査結果報告書

稚内水産試験場
網走水産試験場

要 約

- ・ 平成 26 年の資源密度調査によるオホーツク海海域全体の甲長 7 cm 以上の雄（平成 27 年度の漁獲対象資源）の資源量指数は前年の 0.94 倍で、その水準は中水準であった。
- ・ 甲長 8 cm 以上の雄（獲り残し群）の資源量指数は、前年の 1.1 倍に増加した。
- ・ 甲長 7 cm 台の雄（新規加入群）の資源量指数は、前年の 0.5 倍に減少した。
- ・ 甲長 7 cm 未満の雄（平成 28 年度以降に漁獲対象となるケガニ）は前年の 0.4 倍に減少した。
- ・ 以上のことから、平成 27 年度漁期の漁獲対象資源は、ほぼ前年並み（前年比 0.94 倍）であり、その水準は中水準であると考えられる。しかし、甲長 7cm 台（新規加入群）や 7 cm 未満の雄が減少したことから、今後の資源動向には注意が必要である。

1. 目的

オホーツク海海域に分布するケガニ資源の有効かつ持続的な利用を図るため、資源評価を行い、ABC（生物学的許容漁獲量）の算出および許容漁獲量設定のための基礎資料とする。

2. 調査の概要(図1)

平成 26 年のオホーツク海海域におけるケガニ資源密度調査は、宗谷海域（宗谷総合振興局管内）では5月13日～6月25日、網走海域（オホーツク総合振興局管内）では6月19日～7月2日に実施した。この調査では、全115調査点（宗谷海域46点、網走海域69点）において調査用カニ籠（2寸目）を50個ずつ設置してケガニを採集し、調査点ごとに漁獲尾数の計数と甲殻硬度（甲らの硬さ）や甲長などの測定を行った。

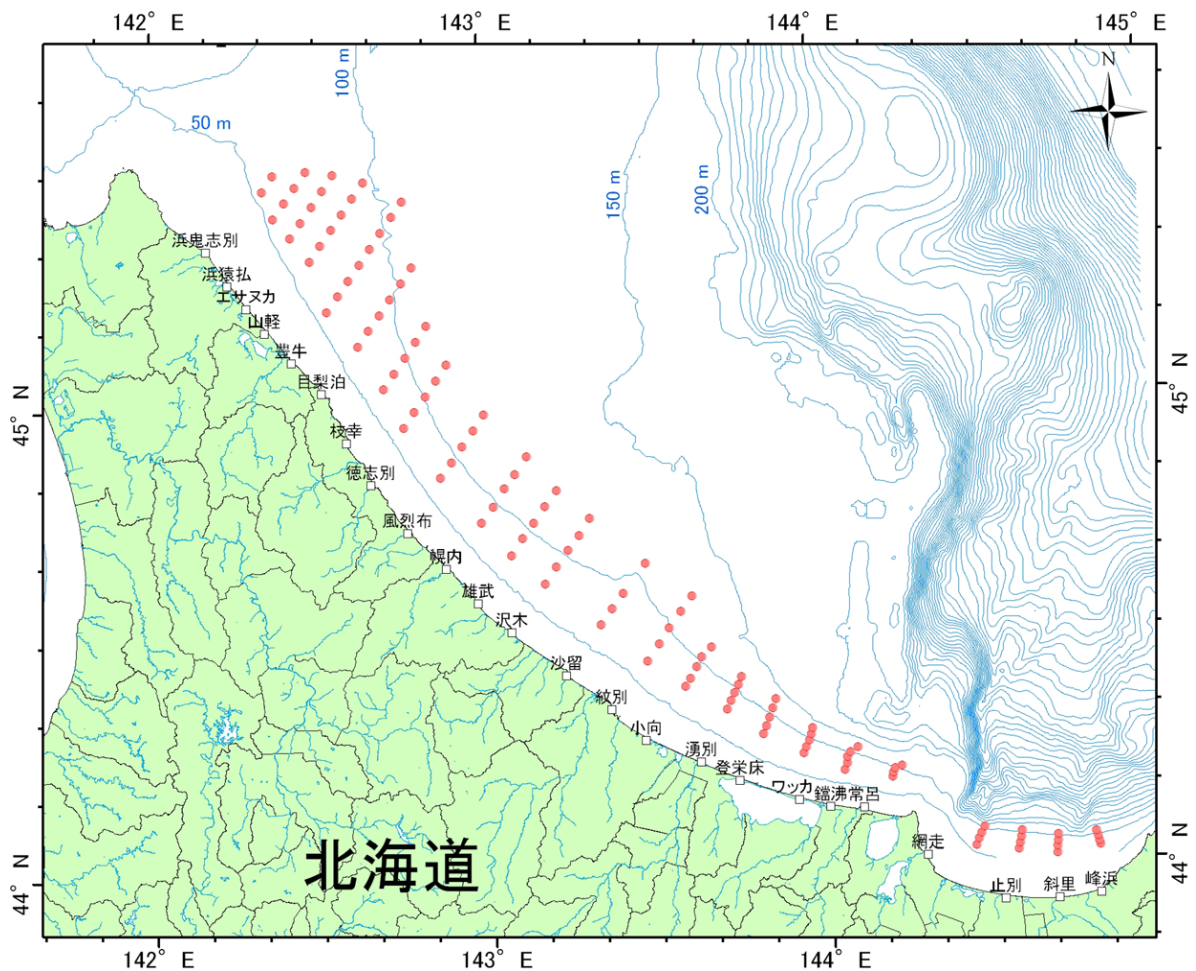


図1 オホーツク海におけるケガニ資源密度調査の調査点図

3. 甲長7cm以上の雄(翌年漁期の漁獲対象群)の資源量指数(図2、3)

甲長7cm以上の雄の資源量指数は、平成18年から平成21年まで減少傾向、平成22、23年は低水準で推移した後、平成25年まで増加傾向であった(図2)。平成26年の値は前年比0.94倍の20,816となり、その資源水準は前年に続き中水準であった。なお、資源水準の基準については、平成元年～平成20年(20年分)の資源密度調査における資源量指数の平均値を基に、平均値17,253×(0.6～1.4)の範囲を中水準、その上下を高水準と低水準とした。

甲長7cm以上の雄の資源量指数は、宗谷海域と網走海域で類似した変動傾向を示した(図3)。平成26年の両海域の値は宗谷海域で10,484(前年比0.90倍)、網走海域で10,332(同0.98倍)であった。

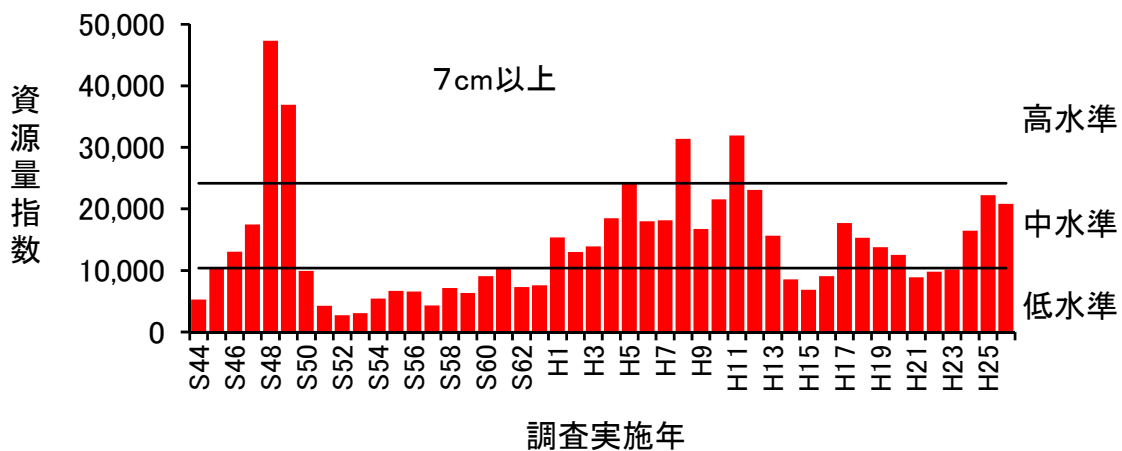


図2 資源密度調査における甲長7cm以上雄(翌年漁期の漁獲対象群)の資源量指数と資源水準

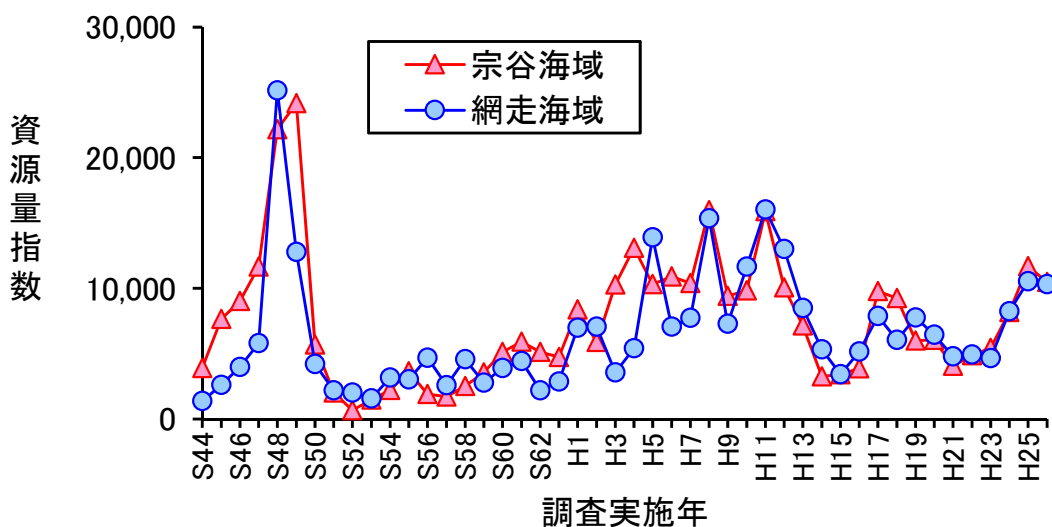


図3 資源密度調査における甲長7cm以上雄(翌年漁期の漁獲対象群)の海域別資源量指数の推移

4. 雄の甲長別資源量指数(図4)

(1) 甲長8cm 以上(獲り残し群)

8 cm 以上の資源量指数は平成 18 年から平成 21 年まで減少傾向、平成 22、23 年は横ばいで推移した後、増加に転じ、平成 26 年の値は前年比 1.1 倍の 18,268 となった。

(2) 甲長7cm 台(新規加入群:翌年漁期に新たに漁獲対象となる群)

7 cm 台の資源量指数は平成 22 年から平成 25 年まで増加傾向であったが、平成 26 年は減少に転じ、その値は前年比 0.5 倍の 2,548 となった。

(3) 甲長7cm未満(翌々年漁期以降に漁獲対象となる群)

7 cm 未満の資源量指数は平成 18 年以降低い水準が続いた後、平成 24 年に大幅に増加したが、平成 25 年から再び減少し、平成 26 年の値は前年比 0.4 倍の 213 であった。そのため、今後の資源動向には注意が必要である。

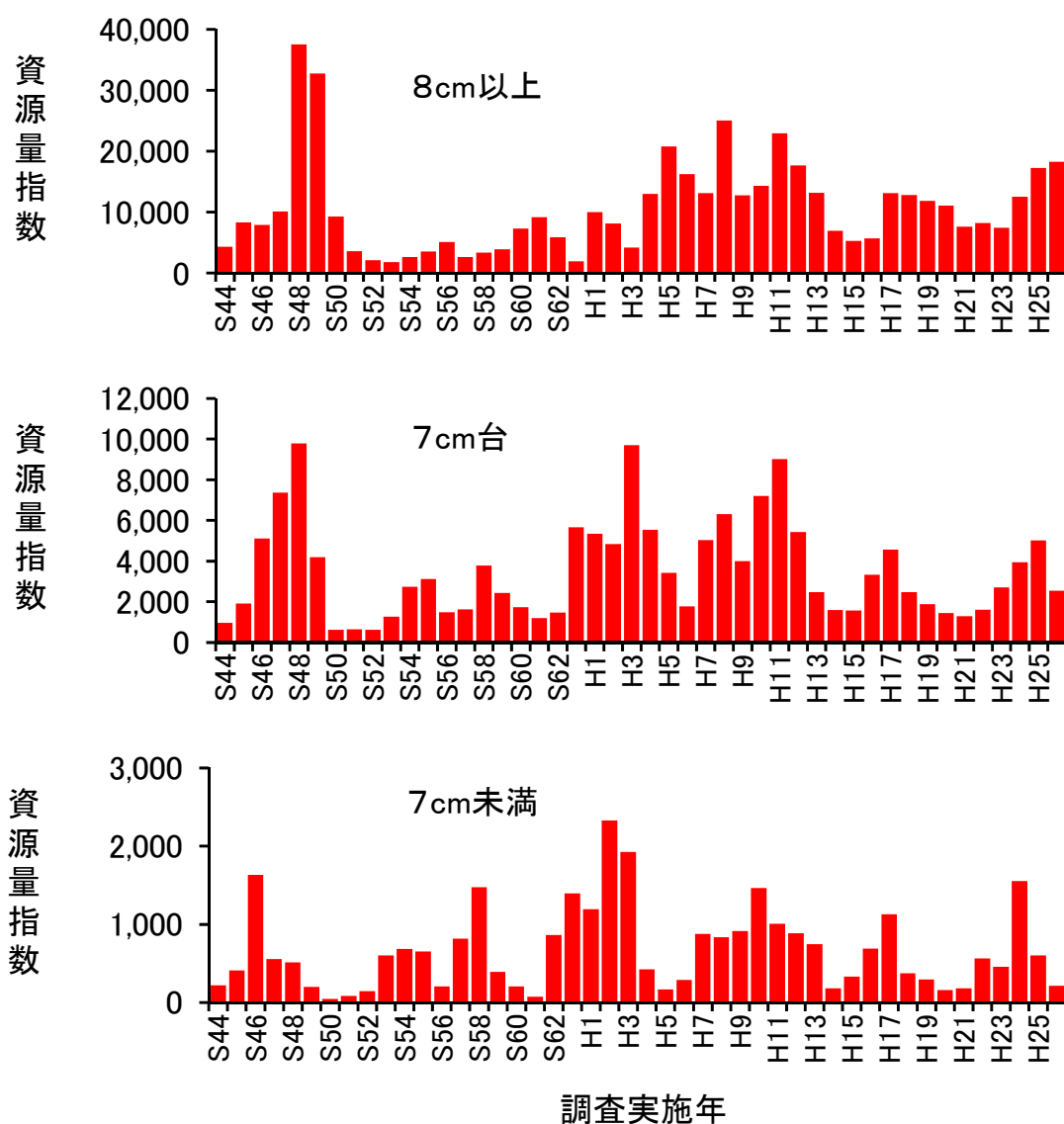


図4 資源密度調査における雄の甲長別資源量指数の推移

6. 甲長7cm以上の雄の海域別資源量指数(図5)

(1)宗谷北部海域(浜鬼志別沖～目梨泊沖): 平成19～23年に低い値で推移した後、平成24、25年に増加したが、平成26年は減少に転じ、その値は前年比0.8倍の4,242となった。

(2)宗谷南部海域(枝幸沖～風烈布沖): 平成21年に1,795まで減少した後、平成25年まで増加傾向で推移した。平成26年の値は前年並み(前年比0.97倍)の6,242であった。

(3)網走西部海域(幌内沖～小向沖): 平成21～23年に低い値であったが、平成24年以降増加で推移し、平成26年の値は前年比1.1倍の8,866となった。

(4)網走中部海域(湧別沖～常呂沖): 平成16～20年の値は1,500前後で推移したが、平成21年以降は1,100以下で低迷しており、平成26年の値は前年比0.6倍の605に減少した。

(5)網走東部海域(網走沖～峰浜沖): 平成13年から20年まで横ばい傾向で推移した後、平成21年から増加傾向となり、平成25年の値は昭和61年以降では最高値の1,789を示したが、平成26年は前年比0.5倍の861に減少した。

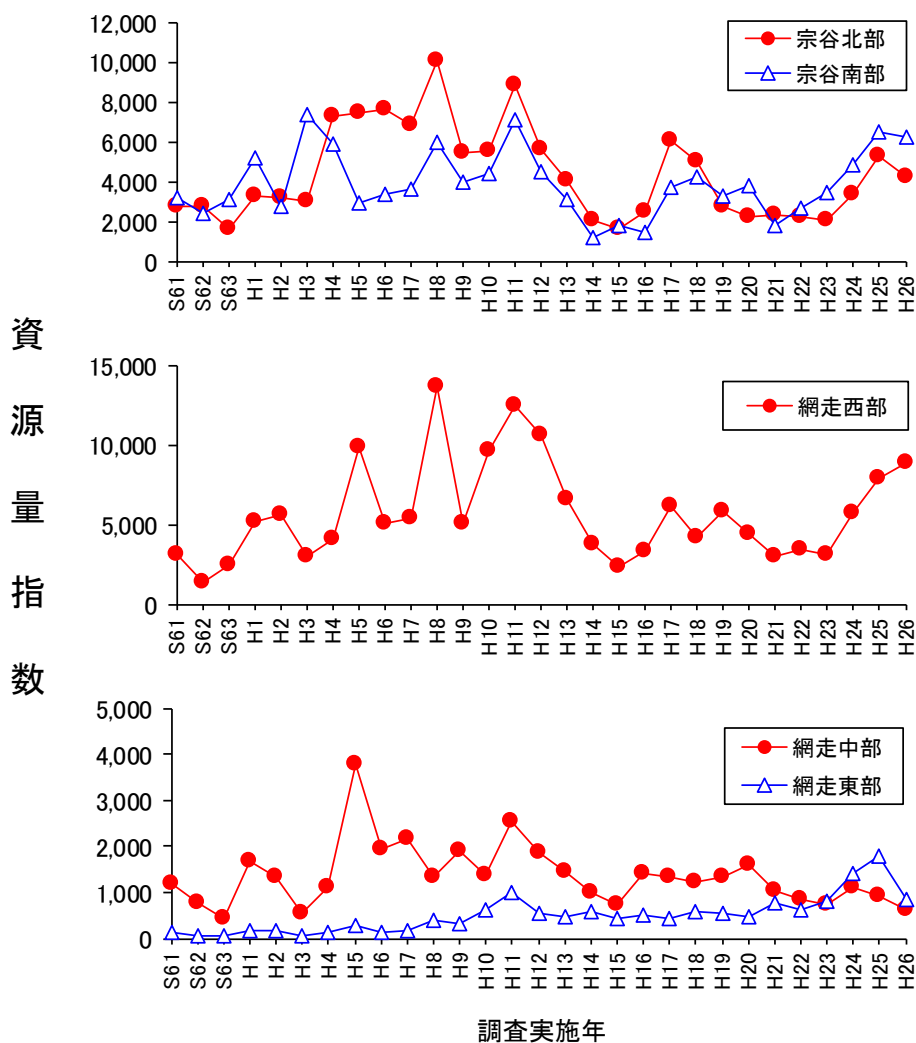


図5 資源密度調査における甲長7cm以上の雄(翌年漁期の漁獲対象群)の海域別資源量指数の推移

7. 調査点別 CPUE(100 かご当たり漁獲尾数)(図6)

平成 26 年の資源密度調査において、甲長 7 cm 以上の雄の CPUE が 500 尾/100 かごを超えたのは、全 115 調査点のうち 24 調査点（前年は 42 調査点）であった。CPUE が 500 尾/100 かごを超える調査点があった定線は、浜猿払、豊牛、目梨泊、徳志別～小向、止別、峰浜であった。

平成 26 年の資源密度調査において、甲長 7 cm 未満の雄の CPUE が 100 尾/100 かごを超えたのは、全 115 調査点のうち 1 調査点（前年は 10 調査点）だけであった。CPUE が 100 尾/100 かごを超える調査点があった定線は、沙留であった。

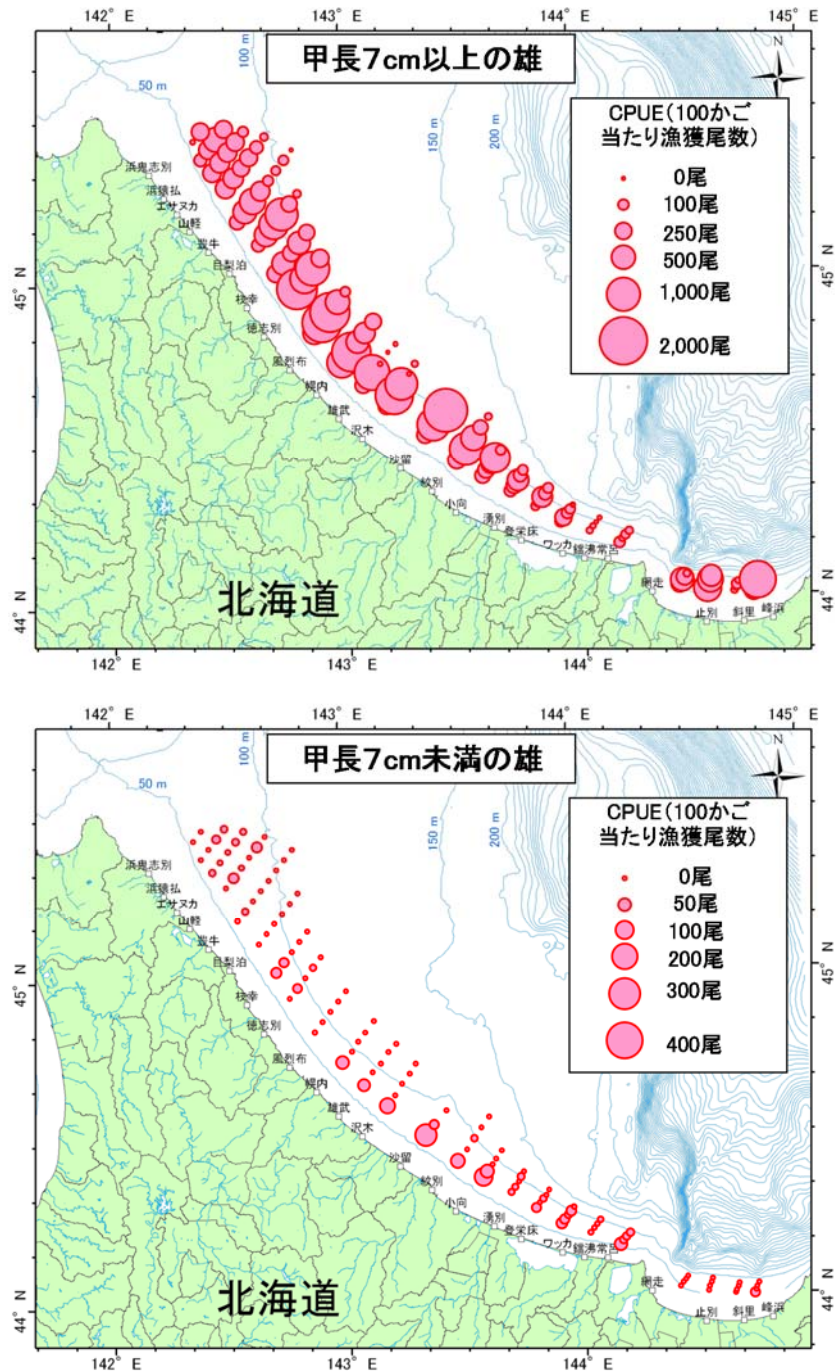


図6 平成 26 年の資源密度調査における雄の甲長7cm 以上(上図)と7cm 未満(下図)の調査点別の 100 かご当たり漁獲尾数